

嗜好調査における項目間の特性  
昭和女大短大 ○渡辺満利子 比護和子

目的 食物嗜好調査の場合、各種食品名や調理名を用いて調査を行うが、調査項目間の関連性を分析することにより、項目選択の方法、および調理法と嗜好の関連性を調べることを目的とする。

方法 厚生省より循環器疾患予防重点地区として指定されている埼玉県大里村において、昭和57年11月実施した常用食物33項目の嗜好調査結果を用い、林の数量化理論オ3類によって分析し、質的項目間の特性を求めた。

結果 食物嗜好度のアイテム・カテゴリー一値のオ1・オ2特性根を各々X軸・Y軸として、二次元座標に作図して観察した。オ1特性根は、食物嗜好のアイテムのうち、“好き”“嫌い”が正の値をとり、“ふつう”が負の値をとっていることから、1根目は、主として食物嗜好の程度を現わしているものと考えられる。

オ2特性根は、食物嗜好の变量および、性・年齢に対するサンプルスコアの分布によって、性差や年齢差による嗜好パターンを表わしているものと解釈できる。またこれらの变量の布値を、その距離の近いものを食品群として、まとめてみると、洋風・和風・麺類・嗜好飲料類などに分けられ、嗜好調査における調理形態や食品群は、その特性の類似性によって、ほぼ同じ傾向を示した。このような結果から、代表的な食品や調理形態を選択して調査を行うことの妥当性、および調理法の違いによって食物嗜好や栄養摂取に影響を及ぼすことが推測される。